

創立五十年誌発刊にあたって



創立50年誌発刊にあたって

第26代所長

横山 順一

(令和5年4月1日～)

昭和48年4月、現在の鳥取市湖山の地に「鳥取県教育研修センター」として設置されて以来、50年という大きな節目の年を迎えました。10年ごとにまとめている記念誌は、今回で5回目の発刊となります。

この記念誌をまとめるにあたり、前身の「鳥取県教育研究所」の時代から数えると70年以上の歴史を持つ当所には、歴代の先輩方が本県教育に対する熱い情熱と高い志を持ち、限られた予算と人員の中で、多くのご苦勞のもと積み上げられてきた知恵や技術が詰まっていることを、改めて実感しました。

過去の記念誌やアルバムをめくると、仁風閣や県立図書館講堂に入居していた頃の研究所外観、昭和48年の本館竣工当時の記念式典、当時はまだ松林だった湖山地域の風景、増築・充実されていく情報教育棟、教育相談棟と教育設備や最新の機器が整備された様子が記録されています。教材づくりや新しい技術の伝達、体験活動等の研修写真には、かつてお世話になった先輩の若い頃のお姿もあり、非常に懐かしくも感慨深く拝見させていただきました。そして、多くの研究紀要や報告書・資料集には、脈々と受け継がれている本県の教育人材育成への営みが記されており、貴重な財産となっています。

去る令和6年2月9日、多数の県内教育関係者にご参加いただき、鳥取県教育センター創立50周年記念／いじめ・不登校総合対策センター設置10周年記念「未来を拓く教育フォーラム」を実施しました。フォーラムでは、①次代の学校教育を担う力を備えた教職員の育成、②急速な情報化を背景とした子どもたちの個別最適な学びと協働的な学びの実現、③誰一人取り残されない学びの保障に向けた取組の推進の3つの観点から、喫緊の教育課題に対する近年の両所・センターの取組の様子をリアルタイムでオンライン配信しながら来場の皆様に見ていただきました。

社会が急激なスピードで変化していく中、そして、自然災害や新型コロナウイルス感染症の流行で経験したように、将来の予測ができないこれからの時代に求められる教育を実現するためには、子ども達と同様に教師自身が主体的に学び続けることが必要であると言われます。

これは、研修を企画・実施する我々も同じではないかと考えます。このため、当所では、今、次年度の研修準備をすすめつつ、「教師の主体的な学びを実現するための研修観の転換」を図るための効果的な研修のあり方について、職員が自主的に勉強会を重ねています。半世紀の間、諸先輩のご努力により様々な形で本県の教育に携わってきた当所ですが、今後、その志を引き継ぎ、時代のニーズを踏まえながら研鑽を深めつつ、学校現場の先生方に伴走して参りたいと思っています。

このたび、半世紀の風雪に耐え、黒ずみ・所々割れ落ちて、地図を描いたようになっていた外壁を改修し、建設当時のように真っ白い外観が蘇りました。昨年秋に先行して改修した情報教育棟には、今春から県立夜間中学「まなびの森学園」の第1期生が通ってきます。「学びたい」という思いを持つ教師や生徒が、ワクワクしながら湖山の地に集う姿を想像すると楽しみでなりません。

今後とも教育センターに対し、皆様のより一層の御理解と御協力をお願い申し上げ、発刊のご挨拶といたします。

回 想



アレゴリーについて

第21代所長

坂本 修一

(平成24年4月1日～平成27年3月31日)

平成27(2015)年3月31日の勤務時間終了直後、定年による退職離任挨拶に続いて、所属職員を前に井上陽水さんの「新しいラブソディー」を歌うことになってしまった。ある職員がギター伴奏まで準備してくれた。忘年会等のカラオケでよく歌った歌だ。

あの歌は、必ずしも恋の歌ではない。選曲は絶妙だったと思っている。歌詞の内容は教育センターの業務と、その進むべき方向を示している。歌詞は寓喩だ。

教育センターではよく、職員を前に、「この業務は県全体の教育を作っている。その進むべき方向と、その成果の大きさを決定する。そういう自負を持って仕事に取り組んでほしい」と訴えていた。「新しいラブソディー」の歌詞は、それにぴったりの内容だと思っている。

曲の冒頭で登場する「未来へ向け走る」「街」とは教育センターのことだ。それに続く「夜空からはじける」「星」はその所属職員である。何度か出てくる「はてしのない」、「まぶしいほど」の、「はなやぐほど」の「夢」はその業務における理想や夢である。「なつかしいメロディー」「あざやかなハーモニー」「喜びのシンフォニー」は職員の協調を表わしている。「星」と「夢」に対置されている「夜空」と「夜」は現実世界やアクチュアルな業務を示す。

つまり、この歌全体で、「みんなで夢を持ち、おもいっきり高い理想を掲げ、協力して未来に向かってつき進んでほしい」と訴えている。

そんなみなさんをいつまでも応援し続けたい、というメッセージとして、寓喩的な意味をもつ歌詞だと思うのだ。

「はじける」ような、「はてしのない」、「まぶしいほど」の理想だ。「飾れるだけ」の「はなやぐ」ような夢だ。それを「ファンタジー」のように「ちりばめて」狂詩曲のように自由奔放に追求してほしいと言っている。

そんな夢や理想を私も持っている。私は今日ここでお別れするが、今の気持ちをこの歌に託して歌う。それが大好きな皆さんに伝わることを願っている、という気持ちをこめて歌ったのだった。

私の定年退職の日のことである。



創立50周年に寄せて

第22代所長

大西 泰博

(平成27年4月1日～平成29年3月31日)

教育センターの創立50周年に思いを馳せ、私事と重ね合わせながら振り返ったところです。

平成2年には長期研修生。そして、平成14年に教育センターと改称した年からは指導主事。さらに、平成27年からは所長として、計10年間お世話になりました。その後に赴任した湖山西小学校や大学生の期間まで含めると、実に16年もの間、湖山のまちが仕事や生活のホームグラウンドでした。思い起こされる教育センターや湖山の風景は時々違うのですが、所長在任の2年間、眺めた情景から時を巻き戻したことが何度かありました。

一つは、玄関近くに植わっているハナミズキのこと。

背丈が6、7メートルはあり、葉が赤く色づく頃にはひときわ目立ちました。木碑には「寄贈者 出雲市長 岩國哲人氏」と記されています。岩國氏は、平成元年に研修講座に登壇され、ハナミズキは同年に植樹されたものです。平成元年といえば初任者研修がスタートした年にあたり、当時の教育研修センターでは「初等教育課・中等教育課…」に課名が改められました。平成も終盤となり、「教育企画研修課」など課名の変更を伴って組織改編が行われ、若手育成を課題としながら初任者研修の在り方が議論されるなど、状況が当時とどこか似ているようでもありました。令和5年10月、岩國氏の訃報に接し「合掌」。

もう一つは、実に「33年ぶり」の大雪のこと。

33年を遡って、大学卒業論文の提出締切日。夜通し書いてようやく仕上げた明け方、ふと外を見ると腰までもある新雪。意を決し、下宿から大学までの「道なき道」を、卒論の入った鞆を背に、雪をかき分けながら突き進んだ記憶があります。道とは本当にありがたいもので、先人に感謝しながら「その道」を辿りつつも、時に、いよいよ自ら切り開かなくてはならないと感ずることがあります。

多様な教育課題が山積し、教育センターへの期待に応えようと模索した当時も、まさにそうでした。『学び続ける教師』のための育成マップを策定して研修体系を見直し、「3年目研修」や講師・学生を対象とした「とっとり未来教師セミナー」を新設するなど、組織をあげて取り組みました。平成28年10月には県中部地震が発生。共に喫緊の課題に向き合いながら、危機対応に懸命に取り組んだ当時の仲間に唯々「感謝」。



「教えること」は「学ぶこと」

第23代所長

小林 傳

(平成29年4月1日～令和2年3月31日)

県教育センター3階の第4研修室に、一幅の書が掛かっている。「教学相致」と書かれたこの書は、倉吉市の書道家であった塚根東翠（喜代蔵）氏のものと思われるのだが、氏は、毎日書道展名誉会員などを務められた方で、平成27年10月に96歳でお亡くなりになっている。これまで第4研修室を訪れる度にこの書を幾度となく目にしてきた私だが、そこに書かれた言葉の意味を、いつの頃からかしみじみ考えるようになっていた。

「教学相致」という言葉は、浅学の私が知る限り一般的な四字熟語の中にはないようなのだが、多分これは「教学、相致す。」と読むのだろう。「教えることと学ぶことが一つになる」、つまり「教えるとは、学ぶことである。」といった、「教える側の謙虚さの必要性」を言い表すと同時に、「教育は、教える側と学ぶ側が一体となることなのだ。」と、教育のあるべき姿を問いかけている言葉と解釈することもできるように思われる。

「教学相致」に似た言葉として、「教学相長」という四字熟語がある。これは、「教学、相長ず。」と読み、「人を教育することは、自分の修行になり、師の側も成長の機会となる。教育は、教える側と学ぶ側が相互に刺激を与え合い、成長することを言う。」という意味である。「教学相致」と「教学相長」、いずれも、教育に携わる者の基本的心構えを象徴している言葉なのだ。

「学び続ける教師」の「学び」のメッカである県教育センターは、この書の精神を次世代の教師達に脈々と語り伝えていくという、その崇高な使命を担っていることを決して忘れてはならない。

そういえば、外国にも同じようなことを言っている言葉がある。

「To teach is to learn twice.」教えることは、二度学ぶことである。(ジョセフ・ジュベール)



新たな教育に向かうために

～不易と流行を意識すること～

第24代所長

三橋正文

(令和2年4月1日～令和3年3月31日)

令和3年1月に中央教育審議会より出された、個別最適な学びと協働的な学びに重点をおいた「令和の日本型学校教育」の実現に向けて、国が決断した1人1台端末の配布と、高速通信環境の整備。着任した私の使命は、この新たな教育に挑戦していく教職員の意識改革とICT活用能力の育成のための鳥取県としての方向性の提示と具体的な取組の推進であったように思います。

そんな折、新型コロナウイルスの感染急拡大。国民全体での行動制限、さらに緊急事態宣言が発令され、これまでの集合型の研修ができなくなりました。教員の働き方改革の流れも加わり、教職員研修の方法や形態等を新たな発想のもとで大きく変換することが迫られました。あらかじめ作成した動画を、教職員が会場に集合せず各学校で視聴し研修する「オンデマンド研修」や、県外講師をオンラインでつなぎ、講義・演習、さらにはオンライン上でグループ協議を行う「オンライン研修」など、今となっては当たり前のような研修が新たに始まったわけです。当時は職員の誰もがはじめてという中、試行錯誤しながら、教育センターをあげて進めたことが思い起こされます。

この度の「令和の日本型学校教育」「コロナ対応」「働き方改革」のように、教育現場はこれからも変わっていくと思います。そんなとき、「不易流行」という言葉を常に意識し、先頭にたって教職員を導いていくのが教育センターです。わずか1年でしたが、鳥取県教育を推し進める教育センターの役割を強く感じた次第です。

これからも教育センターが、鳥取県の大切な未来を担う子どもたちのために工夫と努力を積み重ねながら頑張っている教職員の教師力育成に向けて、前例踏襲に固執することなく、今後ますます充実発展されることを祈念しております。



つながりの『和』を大切に

第25代所長

小谷 洋子

(令和3年4月1日～令和5年3月31日)

教育センターは、一年を通して花が咲き誇る。桜の花の開花から始まり、ハナミズキや菖蒲、山茶花等、四季折々の花が咲き、勤務する職員を和ませてくれる。そして、木々の緑も光り輝き、びわや花梨の実が見事に実り、生命の躍動を感じさせてくれる本当に素晴らしい教育センターである。

さて、今、教員の大量退職・大量採用に伴い、人材育成は重要な課題の一つである。また、全ての子どもたちの可能性を引き出す「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現のため、教職員のICT活用の指導力向上も必須となっている。

このようななか、所長として赴任した令和3年度・4年度の2年間を振り返ると、所内はもちろんのこと、他課・各県センターや市町村教育委員会、学校等、センターと関わりのある全ての人とのつながりの『和』を大切にして、様々な取組を推進したことが思い出される。

まず、文部科学省が打ち出したGIGAスクール構想実現のため、令和3年度からセンターの組織を改編し、「GIGAスクール推進課」を新設した。これによって、教職員の指導観が少しずつ変わり、子どもたちの学びが大きく変わってきた。

また、「OJTによるとっとり人材育成の手引き」を発信し、若手教員はもちろんのこと、中堅教員も管理職も互いに「育ち合い」をキーワードに、とっとりメンター方式で校内の人材育成が推進された。

鳥根県教育センターと連携講座を始めてから20周年にあたる節目の年に行った「鳥取・鳥根連携講座連絡協議会」では、学校を支える教育センターの在り方について協議し、鳥根県教育センターとのつながりを深めることができた。

教育センターには、子どもたちとともに学びながら歩いていく教職員を支える機関として、ふるさとキャリア教育を根底に据え、国の教育改革の動向や本県教育の教育課題を踏まえながら、教職員の研修・調査研究・学校支援を展開してほしい。そして、学校や他の行政機関等とのつながりの『和』を大切にし、「何のためにセンターがあるのか」という原点に立ち返り、学校や教職員から、「センターがあってよかった」といわれるそんなセンターであり続けるために、今後も進化し続けてほしい。事業や研修を通して、センターで咲き誇る花のように、光輝く人材を今後も育成し続けていきたい。全ては、未来を担う「子どもたちの笑顔のため」に。